

まわり道のキャリアも支える土木学会に



山田菊子
論説幹事
東京工業大学
環境・社会理工学院 研究員

まったくもって私事で恐縮だが、この年になって博士号を取得した。大学院を修了してから、会社員、フリーランス、会社員、大学職員、大学教員、そして大学職員と、私のキャリアはまわり道ばかりである。このような私が20数年前に諦めた夢を追うことについて、土木学会の存在も支えとなった。私のまわり道を題材に、キャリア継続支援としての土木学会の存在意義を考えたい。

私は1984年にある大学の土木系の学科に入学した。120人の同級生のうち女性は私だけ。卒業生に女性の先輩が2人いらっしゃるらしいが学部から大学院まで在籍したのは私が最初だと聞かされた。楽しい学生生活の中で女性であることがデメリットであると意識したのは、私より上の世代なら皆が共有するエピソードだ。一つは夏休み一ヶ月間の学外実習で受け入れてくれると表明してくださったのが、実家近くの当時の運輸省の事務所しかなかったこと、一つは大学院の講義の一環でお邪魔した山岳トンネルの掘削現場に入れてもらえなかったこと、そして就職活動では学校推薦も含めて門前払いが多かったこと。研究室配属の際に「女子は取らないからね」とわざわざ伝えに来てくださった方もいたが、これは教養課程時代の私の成績が惨憺たるものだったからかもしれない。

大学院を終える頃には、研究を続けるか就職するかで悩み、学校推薦ではない採用を行っていたシンクタンクに就職した。優秀な先輩や同僚とともに取り組む仕事はやりがいもあり楽しかったが、激務であったことと「女性のキャリアパスはない」という当時の職場の雰囲気疲れ、結婚を理由に正社員を退職して支社の嘱託研究員となった。そして「ドボク」の「ド」の字も見たくなくなった。大学の同級生や、同世代の女性が活躍の様子を見聞きするのは辛かった。それでも、なぜか土木学会と土木技術者女性の会の会費だけは払い続けていた。この二つの会の年会費を払うことが、「土木」と私の間をつなぐ「もやい」（船を、他の

船や岸と繋ぐ綱）だと思ったのだろうか。

ところが、である。数年前に分野は違うがある大学に任期付きの職を得た。その直前から土木学会の男女共同参画小委員会（現在のダイバーシティ推進委員会）にお邪魔するようになっていた。長い間、毎月送られている学会誌も読んでいなかったし、研究発表も、支部や委員会の活動にも一切関わっていない。それでも久しぶりの土木学会の居心地は良かった。気がついたら「土木」が再び身近になった。そして、大学での任期が終わる頃には、学生時代に諦めた学位に取り組む気持ちが強くなった。学位論文に取り組んだ間、プライドを失わずに過ごせたのは、第一には論文の謝辞に挙げた方々のおかげだ。そして同時に、土木学会での活動の機会がある。そこでは所属組織内の肩書きや収入などは関係なく個人としての私が評価された。そして私はこれからも土木に関わる研究を続けようと、次のまわり道を模索している。

「ド」の字も見たくなかった期間があったにもかかわらず、今日、こうやって論説を書く機会を得たのは、土木学会が私と「土木」との間をつなぎとめる「もやい」の役割を果たしたからではないだろうか。土木分野の仕事に直接関わらない期間が長くても、大学の同窓会に行く気にならなくても、私が「土木女子です」と胸を張って言えたのは、1988で始まる会員番号を持ち続けているからとも思える。

土木学会の個人の会員は4万人弱。まわり道の種類は多様だろう。先人のまわり道の経験を共有し「もやい」の存在を示すこと、「もやい」を繋ぎ続ける費用を軽減することなど、土木学会ができることはありそうだ。今後、同じような経験をする人たちを土木学会が繋ぎとめられる可能性があるのだ。業界全体が人材減少に悩んでいる今、「もやい」を結ぶ仕組みを土木学会に作りたい。

現在は異なる業界で大変に活躍している知人がいる。会社を辞めることになった当時、土木の「ド」の字も、大学の名前も見たくない状況でいたと聞いた。私はその時期を経験しただけで大変に悲しく思う。様々な理由で土木を離れる人が、いつかまた土木の近くで活躍する姿を見たい。土木学会がまわり道のキャリアを歩む人を支援するために、私は何をすべきなのかを、日々、考えている。